

# 東アジアにおける族譜（家系記録）の成立と発展

The Formation and Transition of Genealogies in East Asia

金 光林  
Guanglin JIN

## 要旨

筆者は東アジアの姓氏の発生と変遷過程についてこれまで研究を進めてきた。この研究をさらに発展させる形で、今回は東アジアの族譜の形成と発展についてまとめた。

本稿においては、先行研究の成果を踏まえながら、中国・朝鮮・日本の族譜（系図）の形成と発展の過程を辿り、中国族譜の編纂目的・体制（形式）・機能について調べ、中国と韓国・朝鮮の族譜の数と所蔵状況について確認した。そして膨大に残されている族譜が現代の研究資料としてはどのような価値を持ち、そこからどのような学問的成果が期待できるのか、という問題について考えてみた。

族譜は膨大な数の資料を残しながら、従来、この資料を対象にした研究が活発には行われなかった。それは族譜が収録された個々人の家族・宗族関係、出生、死亡などの私的な記録に偏り、膨大の資料の割には社会との関連で活用できる情報が乏しいこと、現存する族譜は中国でも、朝鮮でも近代初期に編纂されたものが多数であり、事実関係に信憑性が足りないものも多く、文献として活用する場合慎重な扱いが必要であり、族譜の編纂目的、その持つ機能が現代社会の価値観にあまりなじまないということが族譜を対象とした研究が振るわない原因だと考えられる。そのために、族譜は歴史研究においては補助資料として活用されるに留まっていた。しかし、族譜に対して、新しい視点と多様な方法を持ち込むことで新たな学問的成果が期待できるようになった。

**キーワード：**東アジア、族譜（家系記録）、族譜の成立と発展、族譜の数と所蔵状況

## 1. はじめに

族譜（宗譜、家譜、系図などとも呼ばれる）とは、東アジア諸国において、父系血縁集団である宗族が系図（世系）を中心に重要な人物の事績、重要な事件、あるいは家訓などを記載した、同種の親族集団の家系に関する文書であり、中国から始まったものである。現在も東アジア諸国には膨大な数の族譜が記録物として残されており、東アジア全体を視野に族譜の資料を比較検討することによって、東アジアの社会史、家族観、人物研究などにおいて、新たな知見を提供することができると思われる。

筆者は東アジアの姓氏の発生と変遷過程についてこれまで研究を進めてきた。この研究をさらに

発展させる形で、今回は東アジアの族譜の形成と発展について発表を行いたい。本稿においてはこの地域の族譜の成立と発展過程を概観し、相互に比較することにより、東アジアにおける族譜の意味を吟味し、膨大に残されている族譜が現代の研究資料としてはどのような価値を持ち、そこからどのような学問的成果が期待できるのか、という問題について考えてみたい。

## 2. 中国における族譜の形成と発展

族譜は他にも宗譜、家譜、譜牒、家乗、世譜、世牒、支譜、房譜など多様な名称で呼ばれ、その中でも「宗譜」「族譜」「家譜」という名称が多用されていた。多賀秋五郎の『中国宗譜の研究』（上

巻)によると、日本とアメリカの図書館に所蔵されている族譜（日本1,252点、アメリカ1,238点）の名称を調べると、宗譜、族譜、家譜の順に使用頻度が高いという。中国国家図書館（元北京図書館）の345点の族譜の名称も宗譜、族譜、家譜の順に使用頻度が高いという。いずれも「宗譜」という名称の使用頻度が一番高いという<sup>(1)</sup>。一方、現代の中国では研究者の間で「家譜」という名称を多用する傾向が見られている。ベトナム、琉球では「家譜」という名称が多用され、朝鮮では「世譜」「族譜」という名称が多用されたという<sup>(2)</sup>。現代の朝鮮・韓国では「族譜」という名称を一般的に使用し、日本では日本の家系記録は「系図」「家系図」「系譜」という名称を用い、中華圏と朝鮮・韓国、ベトナムの家系記録に関しては「族譜」という名称を多用している。この種類の記録物の名称を総称する場合、「家系記録」が穏当であるが、本稿では、これまでの慣習に従い、東アジアの家系記録の共通の名称を「族譜」として使用したい。

中国の家系記録の歴史は長く、殷（商）代にはすでに簡単な世系表が存在し、殷墟で発掘された甲骨文には人物の世系と複数の世代にわたる家族の名前が刻まれている。血縁に基づく宗法制度が確立された西周時代には『世本』『周譜』などの王室と貴族の家系記録が編纂された。漢代の司馬遷は『史記』を編纂するに当たって、『世本』『周譜』を根拠に歴代の王室の世系を系統化させた。『漢書』に至っては、『史記』によって示された世系形式がさらに発展した。

後漢以降に豪族勢力が成長するにつれて家系に

- (1) 多賀秋五郎著『中国宗譜の研究』（上巻）（日本学術振興会、1981）6頁。ここでの多賀の統計によると、日本に現存する中国の家系記録1,252点の中、「宗譜」が46%、「族譜」が16%、「家譜」が12%を占め、アメリカの中国の家系記録1,238点の中、「宗譜」が41%、「族譜」が20%、「家譜」が14%を占め、中国国家図書館（元北京図書館）の家系記録345点の中で、「宗譜」が26%、「族譜」が15%、「家譜」が15%を占めているという。
- (2) 宮脇博史「東洋文化研究所蔵の朝鮮半島族譜資料について」（東京大学東洋文化研究所附属東洋学情報センター報『明日の東洋学』第7号（2002年3月）、宮脇博史「東アジアの中の韓国族譜」啓明大学校韓国学研究院編『韓国族譜の特性と東アジアでの位相』（啓明大学校出版部、2013）、崔在錫「族譜」『韓国民族文化大百科事典』20（韓国精神文化院、1991）。

対する関心が高まり、魏晋南北朝では「九品中正制」（官吏登用制度）が実施され、官吏の選抜において家系が重要な基準になったために、家系記録の重要性がさらに高まり、権威のある名族は族譜の編纂を活発化させた。そこから各家門の家系記録に対する客観的な検証が必要になり、王朝が「譜局」を設置し、譜牒を編纂した。続いて名族を選定し、その優劣を選んで望族表、郡望表（「郡望」とは「郡」と「望」の合成語である。「郡」は中国で行政区域、「望」は名門望族の意味である。「郡望」はある地域、または範囲内の名門望族を指す）を作り、王朝の支配層を形成した。南北朝時代には譜学が専門的学問として発展し、多くの学者が姓氏・家系に関する著書を編纂した。この時代の名族（世家大族）の族譜は門閥を尊び、婚姻を区別し、宗族の権益を守る機能を果たした。

「九品中正制」が廃止された隋代以降、科挙制が実施され始め、官吏の任用に門閥より能力が重視された。それでも社会的には血縁が重要視され、貴族層では「士庶不婚」「士族内婚」の原則と制度によって家門の等級が保障されたために族譜は政治的な機能を持ち続けた。王朝は権力に協力的な有力な家門の既得権を保護し、統治者集団内部の結束と統制を強化するために専門機構において、官修の族譜を多く編纂した。

唐代には族譜は官職への進出と婚姻の区別において役割が大きかった。王朝だけではなく、名族も国家の庇護下に族譜の編纂に関心を持ち、族譜を発行した。

唐代末期から五代時代の政治的混乱期を経過しながら、門閥貴族が没落し、名族の族譜（望族譜）の権威は失墜し、王朝が族譜を統制する機能が退化し、族譜は政治的出世と婚姻の区別における役割も減少した。

唐代末期から五代十国時代の政治的混乱期を経て新しい社会秩序が成立され、その支配層である士大夫階級が形成されると、彼らの間に王朝の族譜統制に関係なく、宗族が主体的に作る私修族譜が生まれた。士大夫たちによって編纂された族譜は官職への進出と婚姻の区別のような政治と社会的機能よりは、儒教的理念に基づいた家族倫理の実践の方法として祖先を崇拜し、宗族を維持する社会及び文化的機能が重視された。宋の時代から官修の族譜はなくなり、族譜は私人が編纂するも

のへと変化した。朱熹が説いた「人家三代不修譜、則為不孝」のような儒教的理念によって、南宋時代以降は族譜の編纂が士大夫層で盛行した。

宋代に始まる新しい族譜の成立に画期的な役割を果たしたのは、歐陽修（1007～1072）と蘇洵（1009～1066）であった。この二人の族譜編纂の理論と実践、そして族譜の形式は後世に多くの影響を与え、族譜編纂のモデルとなった。中国族譜の「五世一図式譜法」の世系図がこの二人によって創製された。

明代には王朝の支配者が孝を以って天下を治めようとし、族譜の編纂を重視し、朱熹の「三綱五常」の儒教の倫理を族譜編纂の宗旨とした。そのためこの時代に族譜の編纂が増加し、会通譜、統宗譜のような大型の族譜が出現した。

清代及び中華民国時期に中国の族譜は量と質ともに中国の歴史上で最高潮に達した。そして族譜の編纂が庶民層にまで浸透・普及した。現在約5万点（種）が存在すると言われている中国の族譜はその多数がこの時代に編纂されたものである。また、この時代にはモンゴル、満州など少数民族も族譜を編纂し、族譜の編纂が中国社会の文化的習俗へと発展した。

現代の中国では、族譜が封建意識の遺産として軽視され、特に文化大革命期には破棄・焼却されたりしたが、改革開放以来族譜が見直され、族譜の編纂がブームとなり、研究も盛んになっている。一方、台湾、香港、マカオ、海外の華僑社会では現代においても族譜が重視され、族譜の編纂が持続されている。

### 3. 中国族譜の編纂目的、体制（形式）、機能

中国族譜の編纂目的は宋代以来の私修族譜に焦点を当てると、大体次のように集約できる<sup>(3)</sup>。

- (1) 宗族の団結を強固にしようとする意図
- (2) 宗族の活動を活発にしようとする意図
- (3) 宗族の秩序を統制しようとする意図

中国族譜の体制（形式）は族譜によって違いが見られるが、ほぼ共通した体制は次の通りであ

(3) 本稿では、中国族譜の編纂目的について、多賀秋五郎著『中国宗譜の研究』（上巻）（日本学術振興会、1981）の12頁の内容を参考した。

る<sup>(4)</sup>。

(1) 序文：新序と旧序とがある。新序はその族譜が編集、あるいは刊行された際の序文であり、旧序はそれ以前の編集、あるいは刊行された際の序文である。普通は新序、旧序の順に記載される。

(2) 凡例：族譜の編集方針を明示したもので、凡例には族人の資格や宗族の範囲を決定する基準も含まれるので、宗族としてきわめて重視したもので、宗族全体の議決によって定められるものが多い。

(3) 目録：目録、総目などと呼ばれるが、総目は全体の目録、目録は各巻・各冊の目次である。

(4) 世系・世表：世系は族人の始祖につながる縦の関係と族人相互の横の広がる関係を示したもので、世表は高祖より玄孫に至る五世を一図とすることを原則とする。これらは族譜のもっとも重要な部分である。

(5) 源流・宗派：源流は宗派の流れを遡源して自派と他派との区別を明瞭にし、その始祖を確認し、宗派は始祖より分類した支派を考証して、本宗と支宗との関係、支派相互の関係を明瞭にするものである。

(6) 誥勅・像贊：誥勅とは祖先に対して王朝より与えられたもので、像贊は始祖とか著名な祖先の像を掲げ、それに贊を附したもので、これらは宗族の名誉を表徴するものとして重要視された。

(7) 別伝・墓誌：別伝は族人の中の著名な人物の伝記を詳しく記したもので、墓誌も著名な人物の伝記を記したものである。

(8) 祠堂記・祠規：祠堂とは宗族が参集して祭祀を行い、一族の共同活動の場となるところで、祠堂記は、祠堂の創建あるいは重建の事業を記したもので、祠規は祭祀をはじめ、祠堂を中心とした宗族の統制に関する規定である。

(9) 家規・宗約：これらは宗族の秩序・統制に関する規定である。

(10) 家訓・家範：族人の人間形成の規範を示したものである。

(4) 本稿では、中国族譜の体制（形式）について、多賀秋五郎の前掲書の14頁～21頁の内容を参考した。王鶴鳴著『中国家譜通論』（上海世紀出版股份有限公司・上海古籍出版社、2010）においては、中国族譜の体制（形式）について多賀秋五郎よりさらに細分化されている。

(11) 義田記・義荘記：これは宗族の祭祀・賑恤・教化・義塚など宗族活動の重要な財源となっている義田、あるいはその租米の収蔵と運用の機関である義荘についての記録である。

(12) 墓記・墓図：墓記（墓志）は祖先の墳墓に関する記録で、これには墓に関する地図の墓図（塋図）をつけるのが普通である。

(13) 芸文・著作：宗族に関する詩文、あるいは著作を収めたものである。

中国族譜の持つ社会的機能は伝統社会と現代社会に分けて考える必要がある。

伝統社会において、族譜は優生、政治、倫理としての機能を果たし、現代社会においては文化遺産、歴史資料、倫理道徳、家族史としての機能を果たしている。

#### 4. 中国族譜の数と所蔵状況

上海図書館が中心になって編纂した『中国家譜総目録』（上海古籍出版社、2008年）には、中国国内外の公的機関と個人が所蔵した中国族譜76,781点の目録を収録しているが、この中で重複された族譜を除くと、族譜の数が52,401点であるという<sup>(5)</sup>。これが現在まで統計された中国族譜の最大の数である。それ以前に中国国家档案局、南開大学歴史学部、中国社会科学院歴史研究所図書館が編纂した『中国家譜総合目録』（中華書局、1997）には、14,719点の中国の族譜の目録が収録されているという<sup>(6)</sup>。中国で編纂された族譜は膨大で、個人が所蔵した族譜は統計に入っていないものも多い。また、この52,401点の中には朝鮮、ベトナムの族譜も入っている可能性がある。

中国国内では、上海図書館に族譜約21,000点が所蔵され、中国内外でも最大の所蔵数である。上海図書館は族譜のデジタル化を進め、「家譜数拠庫」（家譜データベース、<http://search.library.sh.cn/jiapu>）を2000年からインターネットで公開し、すでに1万点以上の族譜の全文画像を館内で閲覧できるという。

次に北京の国家図書館であり、当館では3,200点以上の族譜を所蔵し、「中華尋根網」（中華祖先探しネット）（<http://ouroots.nic.gov.cn>）を2011

年から公開し、国家図書館だけではなく、国内外の約3万点の族譜の書誌情報がこのサイトで検索できる。一方、国家図書館では、「中華尋根網」とは別に、「数字図書館推進計画」（デジタル図書館推進計画、<http://www.ndlib.cn>）を通して、国家図書館と各地の図書館との間を仮想LANで結び、各館のデジタルコンテンツを共同利用している。このサイトを通して、多数の中国図書館所蔵の族譜の全文画像を閲覧することができる。

中国では、ほかに山西省社会科学院家譜資料中心（6,000冊以上）、湖南図書館（1,176冊）、安徽省図書館（200余点）、浙江図書館（1,076点）、天一閣蔵書楼（私人図書館、403点）、吉林大学図書館（861点）、中国社会科学院歴史研究所図書館（980点）に族譜が多く所蔵され、台湾には中央図書館（187点）、故宮博物院図書館（族譜のマイクロフィルム9,970点）、台湾中央研究院民族学研究所図書館、香港には香港大学図書館（374点）に族譜が多く所蔵されている。

海外で中国族譜を多く所蔵しているのは、日本の国立国会図書館（403点）、東洋文庫（800余点）、東京大学東洋文化研究所（344点）、京都大学東洋学文献センター（50余点）、アメリカのコロンビア大学東アジア図書館（1,000余点）、ハーバード大学燕京図書館（200余点）、国会図書館（500余点）、ユタ系図協会（The Genealogical Society of Utah, 300余点、族譜のマイクロフィルム17,000点）、カナダのトロント市公共図書館（100余点）、オランダのライデン大学の漢学研究院中文図書館（49点、多数が台湾の族譜）、ドイツのハイデルベルク大学の漢学研究所図書館、フランス国立図書館（60余点）、イギリス国立図書館（60余点）などである<sup>(7)</sup>。

#### 5. 朝鮮における族譜の形成と発展

朝鮮で族譜が編纂されたのは朝鮮王朝初期として知られている。現存する最古の族譜である『安東権氏成化譜』が1476年に刊行されており、そ

(7) 本稿のここで説明した中国内外の図書館の族譜の所蔵状況については、王鶴鳴の前掲書355頁～365頁の内容を参考した。上海図書館と北京の国家図書館所蔵族譜のデジタル化の状況については、浅野基生の研究報告「中国の族譜：デジタル化の現況を中心に—在外研究報告」（『国立国会図書館アジア情報室通報』第10巻第2号に収録、2012年6月）を参考した。

(5) 王鶴鳴の前掲書、349頁～350頁。

(6) 王鶴鳴の前掲書、350頁。

の前に『文化柳氏永楽譜』（1422）、『南陽洪氏正統譜』（1441）、『晋州河氏景泰譜』（1451）などが編纂されていたことが文献を通して確認できる。これらの族譜は宋代以降の中国の近世族譜（「新譜」とも言われる）の形式の影響を受けて編纂されたもので、このような族譜以前にも朝鮮の社会で家系記録は多様な名称と形式を以て古くから残されてきた。

『三国史記』『三国遺事』に見られる建国神話と各王室の系譜、「広開土王碑」の碑文の高句麗王家の系譜からは、朝鮮の古代社会で王室の家系が口伝から始まり、後に文字として記録されたことが推定できる。『三国史記』『三国遺事』及び統一新羅時代の金石文の個人の伝記類にも家系記録の要素が多く入っている。

高麗時代に編纂された家系記録の実物は現在残っていない。しかし、家録、世譜、家譜、家記、家伝、家状、家乗、世系、譜牒などの用語は高麗時代の文献、墓誌銘などによく現れている。

高麗時代には初期から戸籍を作成し、戸籍に登録された地を本貫地とし、土姓（土着姓氏）を定めるなど身分秩序の樹立しようとした。姓氏の普及と本貫の使用によって、家系を明らかにする記録が現れるのも自然な現象だったといえる。

中央集権化政策が強化された高麗王朝の成宗代（981～997）には高麗の宗廟制が成立し、王室の祖先に対する祭祀が始まり、王室の系譜を管理する殿中省（後に「宗簿寺」と名称が変更）が置かれ、王室の系譜の整理が行われた。また、成宗代に親族の等級によって違う喪服を着る五服制度が制定され、祖先の陰徳によって官職を受ける陰位制が運営された。王室と貴族の親族組織が整備するこれらの制度は家系記録と密接な関係があり、この時期に家系記録が増加したと推定される。高麗時代の家系については文献としては残っているものはないが、約300点くらい残っている高麗時代の墓誌は家系に関する情報が多く含まれており、高麗時代の後期には近世の族譜が登場したようである<sup>(8)</sup>。

14世紀末から始まる朝鮮王朝時代には儒教社会の進展と宗法的な家族・親族・相統制度の定着、

儒教の礼学の発達とともに譜学が尊ばれ、族譜の編纂が盛行した。15世紀には朝鮮王朝では姓氏が普及し、それが族譜の登場する素地を作った。16世紀以来、民衆の成長に伴う賤民層の良人化、日本と清からの侵入により身分秩序が緩み、一方で門閥意識も高潮したことにより、17世紀後半からは朝鮮社会で族譜が量産されるようになった。

朝鮮の族譜の編成方法は、17世紀以前には血縁中心の内外譜（男女両方の子孫を差別なく記録する、中国宗法影響以前の朝鮮の族譜形式）が重視されたので、男女を出生順に編集する一種の男女平等と見られる「従年次法」を取り、外孫も世代数の制限なしに（不限代）収録された。17世紀後半に入ると、本宗中心同姓譜が重視されたので、男子を女子より先に表記する一種の男女差別の「先男後女法」を取る族譜が増え、外孫は2～3世（外孫、外曾孫）に限定して収録された。そして庶子女の場合は嫡子女より出生が早くても「先嫡後庶法」に従い、嫡子女の次に収録された。

韓国に現存して族譜はそのほとんどが19世紀から20世紀の初期に発刊されたもので、この時期に朝鮮で族譜の編纂が急激に増加した。すべての出版物の中で族譜の数が一番多いと言われたのは1910～30年代である<sup>(9)</sup>。

近代初期に朝鮮で族譜が大量に編纂されたのは、近代社会に入り、封建社会の身分制度が廃止されたために族譜の編纂が容易になったこと、族譜の編纂を通して家門を誇示するか、身分上昇を期待する行為が大衆化したためと考えられる。また、日本の植民地支配下で異民族の支配により一般社会の問題よりは同族結合に関心が向けられ、家系の記録を重視する風土が生まれたと考えられる。近代初期に族譜が大衆化し、量産されるのは中国でも同じである。一方でこの時期に量産された族譜の中には、資料として信憑性にかけるものが多い。

## 6. 朝鮮及び現代の韓国の族譜の所蔵状況

朝鮮及び現代の韓国の族譜の所蔵状況について、嶋陸奥彦の研究報告「韓国の族譜—刊行する行為という視点から—」<sup>(10)</sup>を参考に主な図書館の

(8) 金龍善「族譜以前の家系記録」『韓国史市民講座』第24集（「特集—族譜が語る韓国史」、一潮閣、1999）、16頁。

(9) 「姓氏に対する考察」『韓国人の族譜』（韓国人の族譜編纂委員会編纂、日信閣、1977）、88頁。

(10) 『東アジア家系記録（宗譜・族譜・家譜）の総合

所蔵状況を述べると次の通りである。

韓国国立中央図書館：韓国で族譜の所蔵が一番多い図書館であり、日本植民地時代の朝鮮総督府図書館所蔵の族譜が族譜コレクションの出発点となっている。朝鮮の日本植民地時代に族譜の刊行は朝鮮総督府総監部の許可が必要であり、許可を受けて出版されたものの納本によって朝鮮総督府図書館に大量の族譜が所蔵されるようになった。この図書館に所蔵された族譜は2000年の時点で約2,350点であり、大半が1910年から1945年の間に編纂されたものである。

ソウル大学校図書館：2003年の時点でソウル大学校奎章閣文庫に116点が所蔵され、大半（100点）が朝鮮王朝時代のものであり、中央図書館に1,100点以上が所蔵されているが、そのほとんどが1945年以降に現代の韓国で編纂されたものである。

啓明大学校：2003年の時点で500点近い族譜が所蔵され、所蔵された族譜はほぼ半数が朝鮮王朝時代のものであり、古くて、価値の高い族譜を多く所蔵している。

東京大学東洋文化研究所：2000年の時点で500点以上所蔵し、その半分以上が1945年以降に韓国で編纂されたものであり、朝鮮王朝時代のもものが33点、植民地時代のもものが102点所蔵されている。

ハーバード大学燕京図書館：2003年の時点で900点以上の族譜が所蔵され、編纂年代は朝鮮王朝時代が215点、日本植民地時代が102点、1945年以降が421点である。ハーバード大学燕京図書館の朝鮮・韓国の族譜はその多くが故エドワード・ワグナー教授の在任中に収集されたものである。

ユタ系図協会（アメリカ）：この協会が所蔵している朝鮮族譜の大半が他の図書館や個人の蔵書として保管しているマイクロフィルム・コピーであり、多数の図書館の朝鮮族譜を集約しているという特徴を持っている。2001年の時点で総数3,847点を所蔵し、その中で朝鮮王朝時代のもものが380点、日本植民地時代のもものが2,070点、1945年以降のもものが約1,000点である。

的研究』（平成13年度～平成15年度科学研究費補助金 基盤研究（B）研究成果報告書、2004年3月）、4頁～32頁。

韓国には、他に個人が運営している富川族譜専門図書館があり、民間で収集した族譜を多数所蔵している。また、大田市に族譜専門出版社の回想社が設立した族譜博物館があり、仁済大学校図書館もデジタル族譜図書館を運営し、約2,000点の族譜のデジタルデータベース化を完了している。

## 7. 日本における系図の成立と発展

日本で編纂された族譜は一般的に系図、家系図、系譜と呼ばれることが多く、他にも家譜、譜牒、族譜、家乗と呼ばれている。

日本の最古の史書である『古事記』『日本書紀』には、天皇及び古代諸氏族に関する記述が多く、家系記録が日本で古くから行われていたことが伺える。古代日本の氏姓制度の成立によって家系記録を整備する必要が生まれ、814年に『新撰姓氏録』が完成し、京と近畿地方の1,182氏族の出自が収録された。これは後世の系図よりも氏族誌の性格が強く、各氏族の出自を明らかにし、貴族社会の序列を整理する目的で編纂された。特定の家系について記録した現存する日本最古の系図は9世紀に編纂されたとみられる『海部氏系図』『和気系図』である。

平安時代に入ると、古代からの「氏」の組織は次第に有名無実となり、中央では藤原一門が全盛を誇り、賜姓である源氏、平氏、橘氏が高貴とされた。中世には『新撰姓氏録』で1,182氏族を数えた古代姓氏が源平藤橘の四大姓への同化現象が起り、この四姓以外はわずかに十数氏を数えることになった。

同時に古代に形成された「氏」が細分化して、公家は称号（家号）、武士は苗字（名字）を称するようになった。この時代から日本は氏社会から家社会へと変換するようになった。

貴族の身分や官職は家柄によって定まり、地方の地主から成長した武士も土地所有の問題にからみ先祖の出自が重要になった。さらに中世には苗字が定着し、惣領制（平安・鎌倉時代に主として武家社会において、惣領〔嫡子〕が庶子を統制支配した武士団の結合形態）によって家長の権威が高まると家柄を証明する系図を必要とする時代を迎えた。室町時代初期に編纂され、その後に増補改訂された私撰系図集『尊卑分脈』は中世の中央の名族をほとんど網羅し、日本の系図研究の根本

史料とされている。『尊卑分脈』以外の中世の系図には、『大中臣氏系図』『度会系図』『武蔵七党系図』などが伝えられている。

戦国という動乱の時代が過ぎ、江戸時代に封建制が確立されていくと、武士と庶民ともに家格が尊ばれ、家系、家名に対する認識が高まった。特に家門の由来がはっきりしない新興大名にとっては由緒のある系図を持つことは社会的に大きな意味を持った。

江戸時代の第三代将軍徳川家光のときに社会秩序の維持と身分制の基礎を強固にするため幕府主導による系図編纂が行われ、1643年に『寛永諸家系図伝』（総186巻）として完成した。江戸幕府は第二次系図編纂を始め、1812年に完成されたのが『寛政重修諸家譜』（総1,530巻）である。江戸時代には他に『藩翰譜』『諸家系図纂』『武鑑』などの系図が編纂された。

しかし、日本では系図は基本的に王家・貴族・武士の階層の間で編纂され、近世末から近代初期にかけて中国・朝鮮のように庶民層によって系図が量産されることはなかった。

## 8. おわりに

筆者は東アジアの中国、朝鮮・韓国、日本、琉球、ベトナム、満州などを視野に入れて、この地域の族譜の成立と発展過程を概観し、相互に比較することにより、東アジアにおける族譜の意味を吟味し、膨大に残されている族譜資料が現代の研究資料としてはどういう価値を持ち、そこからどういう学問的成果が期待できるのか、ということを探ろうとした。しかし、研究対象が広いこと、本稿の準備時間が短かったことにより琉球、ベトナム、満州の族譜の成立と発展までに概観することができず、研究の初期段階に留まっている。今後、この趣旨の研究を継続しながら、東アジアの族譜（家系記録）の全体像をより明らかにし、族譜の現代社会における意味と族譜資料の活用の仕方について検討したい。

族譜は膨大な数の資料を残しながら、従来、この資料を対象にした研究が活発には行われなかった。それは族譜が収録された個々人の家族・宗族関係、出生、死亡などの私的な記録に偏り、膨大の資料の割には社会との関連で活用できる情報が乏しいこと、現存する族譜は中国でも、朝鮮でも

近代初期に編纂されたものが多数であり、事実関係に信憑性が足りないものも多く、文献として活用する場合慎重な扱いが必要であり、族譜の編纂目的、その持つ機能が現代社会の価値観にあまりなじまないということが族譜を対象とした研究が振るわない原因だと考えられる。そのために、族譜は歴史研究においては補助資料として活用されるに留まっていた。しかし、族譜に対して、新しい視点と多様な方法を持ち込むことで新たな学問的成果が期待できるようになった。

瀬川昌久著『族譜—華南漢族の宗族・風水・移住』（風響社、1996）は、文化人類学の立場から族譜の記録を検証し、その仮構性と事実の間に潜む漢族の歴史意識を追求し、宗族の形成や風水、移住伝承など複雑多彩な記述をフィールドの中から捉え直した好著である。

仙石知子著『明清小説における女性像の研究—族譜による分析を中心に』（汲古書院、2011）は、明清小説に描かれた女性像を主として族譜から抽出した社会通念について分析することで、明清小説の文学性を考究し、明清社会における女性のあり方を解明したものである。

族譜にある多数の個々人の出生、死亡記録を統計資料の乏しい前近代の人口統計に活用する事例もある<sup>(11)</sup>。

## 参考文献

- 王鶴鳴著『中国家譜通論』（上海世紀出版股份有限公司・上海古籍出版社、2010）  
 多賀秋五郎著『中国宗譜の研究』（上巻・下巻）（日本学術振興会、1981、1982）  
 啓明大学校韓国学研究院編『韓国族譜の特性と東アジアでの位相』（啓明大学校出版部、2013）  
 『韓国史市民講座』第24集（「特集—族譜が語る韓国史、一潮閣」1999）  
 崔陽奎著『韓国族譜発達史』（図書出版ヘアン、2011）  
 李樹建著『韓国の姓氏と族譜』（ソウル大学校出版部、2003）  
 太田亮著『姓氏と家系』（創元社、1941）  
 丸山浩一編『増補改訂系図文献資料総覧』（緑陰書房、1992）  
 豊田武著『日本史小百科<家系>』（東京堂出版、1978）  
 『東アジア家系記録（宗譜・族譜・家譜）の総合的研究』（平

(11) 川名はつこ・三浦悌二著「族譜による朝鮮の15世紀以来の月別出生数の分布」帝京大学医学部衛生学教室編『日生気誌26（1）』、1989。

東アジアにおける族譜（家系記録）の成立と発展

成13年度～平成15年 科学研究費補助金 基盤研究

(B) 研究成果報告書、2004年3月

歴史学研究会編『系図が語る世界史』（青木書店、2002）